



コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



ホタルのすみやすい

環境再生に取り組む元気人

一度は大谿川から姿を消したホタル。大谿川を再生し、ホタルも人もすみやすい環境を取り戻すために活動を続ける元気な男性を紹介します。

森貞淳 一さん(67歳)城崎町湯島

城崎温泉街をゆったりと流れる大谿川。昭和30年代には、ホタルが舞い、エビ、ウナギ、カジカなどが地域の人々と共生していました。夏には、川で水遊びをする子どもたちの声も響きわたっていました。

環境悪化で姿を消したホタル

その後、生活様式が変わり、農業や生活排水により、徐々に水質が悪化し、川の水が汚染され、清流を好むホタルなどの生物が姿を消していきま

した。この大谿川を以前のようにホタルの飛び交う美しい川に再生するために立ち上がったのは、城崎温泉大谿川ホタル再生の会会長の森貞淳一さんです。森貞さんは、平成20年7月、会員24人でこの会を設立しました。「地域のみなが生態系や自然保護の大切さを認識し、ホタルも住民もすみやすい地域になればいいですね」と森貞さんは話します。

ホタルを再生

平成15年に下水道が整備され、大谿川の水がきれいになり、ホタルの餌となるカワニナも増えて、少しずつ木屋町通りにホタルが姿を見せるよ

うになりました。森貞さんは「行政に頼るだけでなく、自分たちで率先してまちを良くしていこう」と思い、取組みを「はじめました」と話します。

会を設立してからは、主にホタルの生態や生息調査、川の環境整備、川の浄化啓発活動、看板設置などを行っています。また、川の小石を両岸に集めるなど工夫することで、砂がたまって草が生え、ホタルがすめる環境になりました。その成果があり、平成20年には10匹ほどしか確認できなかったホタルが、平成21年には300匹以上確認できるようになりました。「うれしかったですね。半世紀ぶりに見る光景でした」と森貞さんは笑います。

森貞さんらは、さらにホタルの数を増やすため、繁殖を促す採卵器を川の中に置きました。また、川沿いの灯ろうを木枠で囲って明かりを遮り、鑑賞しやすいように工夫しました。そうして、平成22年には数百匹以上のホタルの乱舞が見られるようになりました。

城崎温泉に付加価値を

「観光で訪れた方から『ホタ



▲土産物店を営む森貞さん。古い物を集めるのが趣味

ルを初めて見て感動した』『子どもにホタルを見せることができ、感謝します』などの声も届けられ、多くの方に喜ばれています。6月は城崎温泉にとって閑散期です。この時期にお客さんにお越しいただき、地域の活性化につながればと考えています」と笑顔で話す森貞さん。

皆さんに愛されるまちに

今年も、木屋町通りのまんだら橋から下流約200メートルの間でホタルが乱舞しています。会では「ホタル情報かわら版」を発行し、会員や旅館へ乱舞予測などを情報提供しています。森貞さんは「ホタルの身になり、生息域にはできるだけ手を入れないようにしています。ごみは拾って草は刈りません。みんなに愛されるまちにするため、今後も頑張ります」と意気込んでいました。

広報マンがやってきた！

幼稚園編

18

三江幼稚園

(豊岡)

〈園児9人〉



三江幼稚園は、近くに県立コウノトリの郷公園があり、周りには緑も多く自然に恵まれた幼稚園です。

5月26日、初めてのクッキング(カレーライス作り)が行われましたので、その様子をのぞいてみました。

初めてのクッキング

園児たちは、クッキングを始める前に、しっかりと手を洗い、帽子やエプロン、マスクを身に着けます。

持参したエプロンは、動物の絵やアニメのキャラクターがプリントされたかわいらしいものばかり。園児たちは、自慢のエプロンを見せ合っていました。



お米をどく

園児たちは、家から持参したお米を臼を描くように丁寧にとぎました。とい

だ後の水は、お米と一緒に流さずに流さないよ。うに慎重に流します。



野菜を切る

先生が「ジャガイモ好きな人？」と聞くと、園児は「はい」と元気よく返事をします。次に、「ニンジンやタマネギは？」と聞かれると「...」。

とたんに元気がなくなります。



野菜の皮むきは、家の手伝いで経験している園児が多く、「皮むきやったことある〜」、と言いながら、でこぼこのジャガイモを上手にむいていました。

包丁を使う際は、「刃を他の人に向けない」、「野菜を切るとき以外は包丁を

持たない」ことを先生と約束し、指を切らないように手を猫のよう



おいしく食べました

仕上げは先生たちが行い、園児たちは、完成したカレーライスをおいしく食べました。

園では、園児たちがナスやピーマン、トマトを育てているので、今後は、それらを取り入れた料理を作ることを計画しています。



笑顔の輪

日高少年野球団(日高)

白球と夢を追い続ける子どもたち

澄み切った青空のもと、日高小学校のグラウンドに、子どもたちの元気な声と、ボールを打つ金属バットの音が響きます。

日高少年野球団は、日高小学校の2年生から6年生までの児童37人が所属しています。今年「但馬で優勝!」という目標を掲げ、ほぼ毎日、練習に励んでいます。

保護者で代表を務める成田和正さんは「今年のチームは、はじめ過ぎるぐらいに。昨年、但馬大会で優勝したことをプレッシャーに感じているかもしれない。もっと楽しくプレーさせたい」と親心



▲「守りきる野球」を目指し、練習に励む子どもたち

をのぞかせます。また「野球を通して、感謝の心やあいさつなどの礼儀、自分の考えを人に伝えることを学んでほしい」と話します。

練習中、指導者からは「もっと大きい声を出せ!」など、厳しい声も飛びますが、この声は練習の疲れから緩んできた子どもたちの心を再度引き締め、奮い立たせます。

休憩時間には、保護者の用意したお茶をみんなでお飲み、先ほどの真剣な表情と違い、いろいろな話で盛り上がり、自然と笑顔があふれます。キャプテンの南大紀君(6年)は「3年生の時、みんなが楽しそうに野球をしているのを見て、自分もやりたくなった。今は走ったり守ったりするのが楽しい。将来はプロ野球選手になり、千葉ロッテマリーンズに入団したい」と力強く夢を語りました。

入団希望・問合せは、成田和正さんまで。
☎ 42-13647